生　　活

生活科は、具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目標としている。

この目標を実現するために、児童が身近な人々、社会及び自然と直接関わる活動や体験を重視し、児童の思いや願いを生かし、関わる対象や自分自身への気付きを生み出し、深め、高めていくことが大切である。

生活科の教科目標の構成

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし → 自立し生活を豊かにしていく

（育成を目指す資質・能力）

○　活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。（知識及び技能の基礎）

○　身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。（思考力、判断力、表現力等の基礎）

○　身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。（学びに向かう力、人間性等）

見方・考え方を生かす

身近な生活に関わる見方　身近な生活を捉える視点であり、身近な生活における人々、社会及び自然等の対象と自分がどのように関わっているのかという視点

身近な生活に関わる考え方　自分の生活において思いや願いを実現していくという学習過程にあり自分自身や自分の生活について考えていくこと

見方・考え方を生かす　生活科の学習過程において、児童自身が既に有している見方・考え方を発揮するということであり、また、その学習過程において、見方・考え方が確かになり、一層活用されること

自立し生活を豊かにしていく

学習上の自立

- 興味・関心があり、価値があると感じられる学習活動を自ら進んで行うことができる。
- 自分の思いや考え等を適切な方法で表現できる。

生活上の自立

- 生活上必要な習慣や技能を身に付ける。
- 身近な人々、社会及び自然と適切に関わることができる。
- 自らよりよい生活を創り出していくことができる。

精神的な自立

- 自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方を求めていくことができる。

学　年　の　目　標　の　趣　旨

○　学校、家庭及び地域の生活に関わることを通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えることができ、それらのよさやすばらしさ、自分との関わりに気付き、地域に愛着をもち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切に行動したりする。

○　身近な人々、社会及び自然と触れ合ったり、関わったりすることを通して、それらを工夫したり、楽しんだりすることができ、活動のよさや大切さに気付き、自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする。

○　自分自身を見つめることを通して、自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えることができ、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活するようにする。

（「小学校学習指導要領解説　生活編」平成 29 年 7 月文部科学省 P. 19）

1　生活科の指導の重点

(1)　複数の内容を組み合わせて単元を構成しよう

生活科は、複数の内容を組み合わせて単元を構想することが多い。その際、内容の構成要素と階層性を意識することによって、内容の漏れや落ちがないように配慮する。

○　内容の構成要素　１……児童が直接関わる学習対象や実際に行われる学習活動等
２……思考力、判断力、表現力等の基礎
３……知識及び技能の基礎
４……学びに向かう力、人間性等

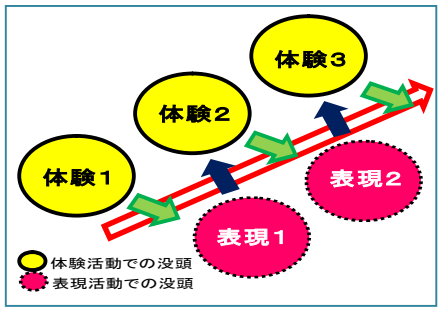
○　内容の階層　第１……学校、家庭及び地域の生活に関する内容【下表(1)～(3)】
第２……身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容【下表(4)～(8)】
第３……自分自身の生活や成長に関する内容【下表(9)】

○　生活科の指導内容の全体（小学校学習指導要領解説　生活編）

階層	内容	構成要素			
		１学習対象･学習活動等	２思考力、判断力、表現力等の基礎	３知識及び技能の基礎	４学びに向かう力、人間性等
第１	(1) 学校と生活	・　学校生活に関わる活動を行う	・　学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々等について考える	・　学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かる	・　楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする
	(2) 家庭と生活	・　家庭生活に関わる活動を行う	・　家庭における家族のことや自分でできること等について考える	・　家庭での生活は互いに支え合っていることが分かる	・　自分の役割を積極的に果たしたり、規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとする
	(3) 地域と生活	・　地域に関わる活動を行う	・　地域の場所やそこで生活したり、働いたりしている人々について考える	・　自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かる	・　それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり、安全に生活したりしようとする
第２	(4) 公共物や公共施設の利用	・　公共物や公共施設を利用する活動を行う	・　それらのよさを感じたり、働きを捉えたりする	・　身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいること等が分かる	・　それらを大切にし、安全に気を付けて正しく利用しようとする
	(5) 季節の変化と生活	・　身近な自然の観察、季節や地域の行事に関わるなどの活動を行う	・　それらの違いや特徴を見付ける	・　自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることに気付く	・　それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする
	(6) 自然や物を使った遊び	・　身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりして遊ぶ活動を行う	・　遊びや遊びに使う物を工夫してつくる	・　その面白さや自然の不思議さに気付く	・　みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする
	(7) 動植物の飼育・栽培	・　動物を飼ったり、植物を育てたりする活動を行う	・　それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかける	・　それらは生命をもっていることや成長していることに気付く	・　生き物への親しみをもち、大切にしようとする
	(8) 生活や出来事の伝え合い	・　自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行う	・　相手のことを想像したり、伝えたいことや伝え方を選んだりする	・　身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かる	・　進んで触れ合い交流しようとする
第３	(9) 自分の成長	・　自分自身の生活や成長を振り返る活動を行う	・　自分のことや支えてくれた人々について考える	・　自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたこと等が分かる	・　これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもち、これからの成長への願いをもって、 意欲的に生活しようとする

(2)　体験活動と表現活動を単元構想へ位置付けよう

児童が没頭できる体験活動は、表現活動を豊かにし、その表現活動から次の体験活動への意欲を高めるという相互作用がある。生活科では、体験活動が質的に高まるように意図的・計画的に単元の構想を工夫する。表現活動は、無自覚な気付きを自覚に向かわせ、次の体験活動の質を高めることができる。また、気付きを共有することで、新しい体験活動へと発展させることもできる。



【体験活動と表現活動の相互作用】

２　主体的・対話的で深い学びを引き出す生活科の学習指導

生活科の学習指導の充実のためには、綿密な指導計画を作成し、以下の生活科学習の特質を生かした学習指導を行うことが大切である。

○　児童の身近な生活圏を活動や体験の場の対象にする。
○　児童が身近な人や社会、自然と直接関わる活動を重視する。
○　児童の思いや願いを育み、意欲や主体性を高める学習過程にする。
○　働きかける対象について気付くとともに、自分自身に気付くことができるようにする。
○　児童の姿を丁寧に見取り、働きかけ、活動の充実につなげる。

(1)　「気付き」の質を高める学習活動を充実させよう

具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考え、気付きを確かなものとしたり、新たな気付きを得たりするようにするため、活動や体験を通して気付いたこと等について多様に表現し考えたり、「見付ける」、「比べる」、「たとえる」、「試す」、「見通す」、「工夫する」などの多様な学習活動を行ったりする活動を重視する。

※　「気付き」とは、対象に対する一人一人の認識であり、児童の主体的な活動によって生まれるものである。そこには、知的な側面だけではなく、情意的な側面も含まれる。また、気付きは次の自発的な活動を誘発するものとなる。　（「小学校学習指導要領解説　生活編」平成 29 年７月文部科学省 P. ７）

ア　単に活動や体験を繰り返すのではなく、話合いや交流、伝え合いや発表等の表現活動を適切に位置付けることが大切である。この体験活動と表現活動の相互作用により学習活動を質的に高めていく。

イ　無自覚な気付きから自覚された気付きへ、一つ一つの（個別的な）気付きから関連付けられた気付きへ、対象への気付きから自分自身の気付きへと高まるように支援する。

ウ　気付きの質を高めるための学習指導の進め方

・　試行錯誤や繰り返す活動を設定する。
・　伝え合い、交流する場を工夫する。
・　振り返り、表現する機会を設ける。
・　多様性を生かし、学びをより豊かにする。

(2)　伝え合い交流する活動を充実させよう

身近な人々との関わりや自分自身のことについて考えるために、活動したことや体験したことを振り返り、自分なりに整理したり、そこでの気付き等を他の人たちと伝え合ったりする学習活動を充実させる。その際、言葉、絵や身体表現等の様々な方法での表現活動を一層重視する。

ア　活動や体験について一層の充実を図る観点から、言葉等を中心としたコミュニケーション活動によって他者と交流する中で認め合ったり、捉え直したりする学習活動を工夫していく。

イ　多くの人と進んで交流していこうとする児童の姿を目指して、身近な人々と伝え合う活動を取り入れ、人と関わることの楽しさが分かるように工夫する。

ウ　児童が自分の気付きを伝えたいと強く心に抱くよう、活動や体験を充実させるとともに、友達と気付きを交流することで、次の活動が豊かになるよう単元の構想を工夫する。

エ　表現活動については、児童の実態に合わせて、言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法で表

現自体を楽しむとともに、記録し表現する方法として、１人１台端末等、ＩＣＴの効果的な活用を考える。

(3)　安全教育や生命に関する教育を充実させよう

通学路の様子を調べ、安全を守ってくれる人々に関心をもつなど、安全な登下校に関する指導の充実に配慮する。また、自然に直接触れる体験や動物と植物の双方を自分たちで継続的に育てることを重視するなど、自然の不思議さや生命の尊さを実感する指導の充実に配慮する。

ア　学校での生活はもちろん、登下校も含めた地域での生活や家庭生活において、楽しく安心で安全な生活ができるようにする。

イ　継続的な飼育、栽培を行うことにより、生き物への親しみをもち、命の尊さを実感できるようにする。

ウ　家庭生活における自分の役割を果たすことや、健康に気を付けて生活することの大切さを実感できるようにする。

(4)　幼児教育及び中学年以降の学習の接続を図る指導を工夫しよう

幼児教育とのつながりや、低学年での各教科における学習との関係性、中学年以降の学習とのつながりを踏まえ、生活科を核として合科的・関連的な指導の一層の充実を図る。また、児童が自らの成長を実感できるよう、２学年間を見通した指導計画を立て、３学年以上の学習への接続に配慮する。

ア　幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿を踏まえて、「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム」を活用し、効果的なスタートカリキュラムを編成する。

○　入学当初における他教科（国語科、音楽科、図画工作科）等の内容を取り入れた単元を構想し、体験活動を通して楽しみながら学べるように工夫する。

○　幼稚園や保育所等との連携を図り、入学前の児童の実態の把握に努める。

イ　２学年間を見通して、学習活動を継続的・計画的に位置付ける。

(5)　評価を次の学習につなげよう

生活科の評価は、結果よりも活動や体験の過程を重視する。学習過程における児童の「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」を評価し、目標の達成に向けた指導と評価の一体化を図る。

ア　評価は、結果よりも活動や体験そのもの、すなわち結果に至るまでの過程を重視して行う。

イ　より信頼性の高い評価になるように、様々な立場からの評価資料を収集し、児童の姿を多面的に評価する。

○　教員による行動観察や作品・発言の分析等　　○　児童による自己評価や相互評価

○　ゲストティーチャーや学習をサポートする人、家庭や地域の人々からの情報

ウ　単元全体や授業時間外の児童の変容や成長の様子を捉えた評価も大切にする。

エ　学習活動や学習対象の選定、学習環境の構成、配当時間数等の単元計画、年間計画等の評価等を行う。

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業の工夫・改善（小２　生きものなかよし大作せん）

身に付けさせたい力等

・　生き物を探して捕まえたり、飼育したりする活動を通して、生き物の育つ場所やえさを考えるなどして、変化や成長の様子に関心をもつ。

活動例〈ＩＣＴを活用して、生き物の様子を捉えたり、観察記録を残したりする〉

・　１人１台端末のカメラ機能で撮影した生き物の様子を大型提示装置で観察する。

・　撮影した生き物の写真をつなげてスライドショーにして、自分で育てた生き物の成長を実感する。

・　１人１台端末の学習支援ソフトを用いて観察記録を残す。その際に、「体」「動き」「すみか」等観察の視点をもち、観察したことを視点ごとにまとめる。